

美しくなつかしい、日本をのせて。

# Cradle

[クレードル] 出羽庄内地域文化情報誌

11

2021 November/December  
TAKE FREE  
NO.68

特集  
酒井家  
庄内入部400年①  
庄内憧憬  
佐藤正光  
中国古典文学研究者



Cradle 11

美しくなつかしい、日本をのせて。  
[クレードル] 出羽庄内地域文化情報誌

2021 November/December  
令和3年11月1日発行(隔月奇数月発行)第12巻2号(通巻68号)

発行 Cradle事務局 山形県鶴岡市山王町8-15 [株式会社 出羽庄内地域デザイン] 電話0235(64)0888  
制作 Cradle編集部 山形県酒田市京田2-59-3 [コマツ・コーポレーション] 電話0234(41)0012



神秘の鶴間池 無垢なる森に囲まれて

S 荘内銀行

FIDEA GROUP

合理的な発想と基礎教養を身につけた生徒たちは、「学ぶ」ことから「問い合わせをする」立場になる。

庄内の気風を今頃になつて感じている。

## 庄内藩校致道館

佐藤 正光



旧庄内藩校致道館の講堂と庭。東北で唯一現存する藩校建造物。

江戸の儒者荻生徂徠は独自の学問を考案して、「徂徠学」を全国に流行させた。その学風は儒学の根本である「道」を政道（政治の理念）と捉え、実践的で合理的な思考によつて、理想的な政治を実現することを理念とした。その思想に傾倒した多くの人たちの中に水野元朗と疋田進修という庄内藩士がいた。二人は江戸藩邸でお勤めの傍ら、晩年の徂徠に師事した。二人の熱心な態度に応えた徂徎は水野疋田宛の往復書簡を送り、今も「徂徎先生答問書」として致道博物館に所蔵されている。とくに徂徎は当時二十代だった進修を気に入って字（成人してつける名）を贈った上に、「疋田進修の字の説」（説は意見、考え方の意）という文章まで著した。

その徂徎の教育理念を実現した

学校が、庄内藩校致道館である。

庄内に帰つた元朗に学んだ加賀山

寛猛は元朗の娘婿白井矢太夫の師となり、白井は江戸で徂徎の弟子太宰春台らに教えを受け、庄内に帰つて致道館の初代祭酒（校長）となつた。白井は徂徎学を忠実に守つて天下国家を治める道を大義とし、学問は抽象的な哲学や漠然とした理想ではなく、実践的な政治道德を身につけるためのものとした。目標が具体的なので藩校の生徒には学ぶ意義が分かりやすい。とし、学問は抽象的な哲学や漠然とした理想ではなく、実践的な政治理想ではなく、実践的な政

生徒には学ぶ意義が分かりやすい。とし、学問は抽象的な哲学や漠然とした理想ではなく、実践的な政治理想ではなく、実践的な政

「問い合わせをする」立場になる。生徒同士が議論をして答えが見つからない時、教授のもとにゆき指南を受ける、今の大学の演習やゼミのようなもの。その上の段階では藩校内に自分の部屋が与えられ、終日そこで自由に過ごせた。必要な書物がそろついていて自由に好きなだけ勉強ができる。例えば私の研究室にも、昼も夜も卒論の調べ物

をしている学生がいるように。鶴岡市の致道館のホームページにその教育課程の丁寧な説明がある。現在、中高一貫校が学力を伸ばすといわれる大学で多くのゼミに入つて教授に質問ばかりしていた。庄内の氣風を今頃になつて感じている。だつたという。

私は高校時代サッカーバスケットを上げ、予備校に通つて学問の面白さを知り、「ゼミの武藏」といわれる大学で多くのゼミに入つて教授に質問ばかりしていた。庄内の氣風を今頃になつて感じている。

さとう・まさみつ／鶴岡市出身。武藏大学人文学部日本文化学科卒業。二松学舎大学大学院中国学専攻博士課程修了、文学博士。現在は東京学芸大学教育学部教授、一橋大学大学院連携教員。東京学芸大学排球部長。専門は中国古典文学。特に魏晋南北朝の貴族文学。NHKカルチャーフォン（漢詩をよむ）に出演。講師を務める。土曜午後8時30分～9時。

天保十二年子丑月  
酒井家庄内入部400年特集

# 酒井家庄内入部400年特集

元和8(1622)年、酒井家3代忠勝が庄内に入部以来、  
来年で400年を迎えます。

入部以降幾多の困難を乗り越え、米づくりを中心とした産業、  
藩校致道館による教育を進め、明治以降も庄内に留まり、

絹織物など庄内の産業振興を支えてきました。

庄内入部400年の機に、その歩みを学ぶことは、  
私たちが抛って立つ地を知り、未来を拓くことにつながります。

今回は庄内に多く残る当時の絵図など資料をもとに、

入部から幕末までの約250年をたどります。

【企画協力】  
酒井家庄内入部400年記念事業実行委員会

【取材協力・写真提供】  
公益財団法人致道博物館・鶴岡市郷土資料館  
本立信成株式会社・公益財団法火本間美術館

【参考資料】  
『臥牛 菅実秀』加藤省一郎著、致道博物館刊 1966年  
『庄内藩酒井家』佐藤三郎著、中央書院刊 1975年  
『庄内藩校致道館』庄内文化財保存会編、刊 1981年  
『新編 庄内人名辞典』庄内人名辞典刊行会編、刊 1986年  
『庄内藩事件史』佐藤三郎著、本の会刊 1987年  
『シリーズ藩物語 庄内藩』本間勝喜著、現代書館刊 2009年  
『図説 鶴岡のあゆみ』鶴岡市史編纂会編、鶴岡市発行 2011年  
『巡回特別展 新徵組一江戸から庄内へ、剣客集団の軌跡』日野市刊 2012年  
『大泉叢誌絵図』致道博物館編・刊 2018年  
『戊辰戦争絵巻』を読む!致道博物館編・刊 2018年  
『まるっこ、早わかり!!庄内の戊辰戦争~鶴岡市郷土資料館「庄内の戊辰戦争展」から~』鶴岡市郷土資料館編・刊 2019年

天保十二年子丑月  
酒井家庄内入部400年特集  
御輦領之所其保庄内御領地之命下早打到着追手前群集図  
天保12(1841)年7月16日、三方領知替え撤回の知らせを伝える早駕籠を、  
追うように城下へ集まつた百姓たち。鶴ヶ岡城大手門前には町人も合わせ  
て数千人が集まり、夜を徹して酒宴をし、喜びの声を響かせたという。  
「大泉叢誌(たいせんそうし)絵図 三十四」致道博物館蔵





特集  
酒井家  
庄内入部  
400年!

# 酒井家入部

戦国時代、庄内支配の状況は目まぐるしく変わりました。  
関ヶ原の戦いで徳川家康が勝利し、江戸時代を迎えると、  
山形藩の最上義光が庄内を治めます。  
20年ほどで改易となります。新たに庄内統治を

任せられたのは、徳川家譜代の大名酒井家3代忠勝でした。

歴史に残る「徳川四天王」、その筆頭といわれたのが酒井家初代、忠次です。酒井家はどのような家柄だったのか、また入部後の藩政について、致道博物館主任学芸員の菅原義勝さんに伺いました。「忠次は家康の15歳上で義叔父にあたります。



特集  
酒井家入部  
庄内藩 400年①

# 藩政改革

庄内は天惠の沃野、正に之を以て国を立つべき楽土なり——  
3代忠勝のこの言葉通り、庄内平野はのちに

日本屈指の穀倉地帯へと発展します。

その土台ができたのは、多くの先人たちが懸命に生きた

庄内藩の「改革の時代」です。

徳川幕府の「米本位制」による財政基盤によって、農政をめぐる改革に搖れた江戸前期から中期。鶴岡市郷土資料館の今野章さんと、当時の領民の暮らしづらについてたどってみます。

「庄内の領民は豊かではなかったかもしれません、例えば家族の病気などによる不慮の支出等がなければ、何とか生活はできていたようです」。しかし藩への不慮の出来事は容赦なく降りかかります。宝永4（1707）年の富士山噴火災害復興による東海道宿普請のように、幕府から大掛かりな土木工事への手伝普請をたびたび命じられて工事費がかさみ、また、7代藩主忠寄が幕府の老中と

立」は、3カ年を見据えた收支予算案でした。光丘は藩の借り入れを整理し、幕府から借用していた2万両を返済するなど成果を出しますが、相次ぐ凶作や手伝普請などで頓挫し、財政は行き詰まりに陥っていきます。そんな局面を救つたのが郡代の白井矢太夫、庄内における「寛政の改革」の立役者です。白井は忠徳の求めに応じて財政再建の改革案を提出、その施策は困窮する農民に対し藩からの貸付米金を切り捨てるなどの、いわゆる「徳政令」でした。この時、



「日本一の大地主」と称された酒田の本間家は奥羽諸藩への大名貸も行っていた。特に庄内藩には貸付だけでなく資金援助も惜しみなく、藩の運営を大きく支えた。「本間光丘像」本間家旧本邸蔵

本間光丘も案を提出しますが採用ならず、本間家が再び財政改革に参画するのは4代光道、天保の時代になります。また白井は、土風の刷新には教育の振興が必要と進言。忠徳は藩政を担う人材の育成を目的とした学校の創設に着手します。そうして文化2（1805）年「個性と自主性を重んじる」徂徠学を取り入れた「藩校致道館」が開校しました。

致道館では武芸も奨励する一方で、磯釣りや鳥刺しなど野外に出かける野遊びも盛んに行われました。その目的は心身鍛錬で、竿を握って磯魚や小鳥を獲ることよりも、猟場までの遠い道のりを歩くことを武用の一助とするなど、自己と向き合い鍛錬に励みました。こうして藩士たちは「個性伸長」を旨とした学問を通して土風を磨きながら、時代は江戸後期、幕末へと向かっていきます。

なつて支出が増加するなど、さまざまな要因が重なって財政を圧迫します。さらに度重なる大凶作が追い打ちをかけ、領民には御用金や年貢の増徴が課せられ、厳しい儉約令も敷かれました。「不慮の出費に充てるため、藩は領内の富裕層から多額の御用金を徴収しました。今は酒田が商人町といわれますが、鶴岡にも豪商はいて、藩財政への借財によって没落した商家もありました」。商人の台頭は江戸だけでなく庄内でも見られ、特に酒田の本間家は廻船問屋として財を成していました。9代忠光丘を登用して財政改革にあたらせます。光丘が出した「安永御地盤組

《年表》

300~200年前

●宝永4(1707)

富士山噴火災害復興のため東海道宿普請を仰せつかり、6カ所の手伝普請を受け持つ

●寛延2(1749)

7代忠寄が老中となる

●安永5(1776)

本間光丘が「安永御地盤組立」を提出

●天明元(1781)

本間光丘が「天明御地盤組立」を提出

●寛政7(1795)

寛政の改革

●文化2(1805)

大宝寺に藩校致道館が落成

●文化4(1807)

蓮台火事により家屋1300戸が類焼

●文化13(1816)

致道館を十日町口に移築

コラム  
二

## 藩校教育とゼミナー



出典「庄内藩校致道館」HPより

全国にある多くの藩校では、道徳的な教養を身につける朱子学を教學していましたが、致道館では道徳を学びながら実践的な考え方方に重きを置く「徂徠学」を採用していました。10歳で入学すると、年齢を問わず学力に応じて進級し、小学校から大学院課程まで学ぶことができました。個性を伸ばすこと、自ら学ぶ力をつけることを重視していました。個性を伸ばすことで、基本は自学自習。その結果を数々で討論して研究を深める「会業」、今でいう大学のゼミナールが致道館ではすでに行われていました。



庄内藩の武士たちは総じて「野合」といわれる磯釣りや鳥刺しに熱中していた。

夜が明ける前から家を出て、海へ山へと数十キロも歩いて向かったという。

「庄内浜磯釣りの図」(旅河家史料)鶴岡市郷土資料館蔵

田植えは家族、親類総出で行った。絵図には「はんこたんな」をつけた女性の姿が見える。

稻刈りや脱穀、俵詰めなどを経て、11月末の期日に間に合うように村ごとに藩の米蔵に年貢米を納めた。

「大泉四季農業図」より田植えと年貢納入の図 致道博物館蔵



特集  
酒井家  
庄内入部  
400年①

# 三方領知替え

10代藩主忠器の藩政時代、「百姓たりと雖も二君に仕えず」とのスローガンのもと、数百人の百姓が江戸に上り、駕籠訴を繰り返した三方領知替え阻止運動。280日にも及ぶこの運動は、幕府の命令が撤回されるという前代未聞の結末につながりました。

天保4（1833）年、半年の間に大洪水と大凶作、大地震、大津波に見舞われた庄内藩。その傷跡も癒えない天保11年11月1日、「庄内藩主の酒井忠器を長岡に、長岡藩主の牧野忠雅を川越に、川越藩主の松平斉典を庄内に」という三方領知替えの幕命が突然出されました。

早追によってその知らせが庄内に伝わると、同月22日には西郷組の百姓が雪深い山を越えて江戸上りを決行。宿の通報で失敗に終わりますが、それに続く川北一番上りが江戸城前で駕籠訴を実現させます。その後も庄内一円の百姓が次々に江戸へ。大老や老中だけでなく、水戸藩主や上野の寛永寺など有力な大名や寺院に

長岡へ転封させられることに対し、内心では納得していなかったといいます。「その中で百姓たちの動きが世の中に影響を与えていたのも確かで、藩役人は江戸に来た百姓たちに

これ以上駕籠訴をしないよう説得することはあつても、厳しくとがめたりはせず、むしろ江戸藩邸で大根汁などの食事を振る舞つてから、国許に帰したりしていったようです」。

天保12年7月、三方領知替えは百姓たちの反対運動に加え、転封を推し進めていた徳川家斉と川越藩松平氏が亡くなつたこと、外様大名や幕閣からも反対の声が高まつたことなども重なり、徳川家慶によつて撤回されました。その知らせがもたらされた庄内では、庄内一円の武士、町民、百姓が一緒に喜び、祝つたといわれています。その後、庄内藩は水野忠邦によつて報復ともいえる過酷な印旛沼疎水工事を命じられ、大きな負担と犠牲を払いますが、幕命を覆したこの一件は、幕府権力の弱体化を象徴する出来事として歴史に刻まれるものとなりました。

も領知替え反対を訴えました。同時に庄内各地では、百姓たちが数万人規模の反対集会を何度も開催。地域全体を巻き込んだ大騒動となります。なぜ百姓たちがそれほどまでに強く反対したのか、致道博物館主任学芸員の菅原義勝さんは「転封反対を訴える百姓たちの訴状には、天保4年の飢饉で藩が配給米などの救済策を工面したため、領内に一人も餓死者を出さなかつたことについて書かれています。実際は、領知替えにあたつて酒井家から百姓に課せられる負担や、新しく来る川越松平氏の苛政への危惧もあつたようです。いずれにせよ、主君の善政を理由に転封反対を叫ぶ百姓の姿は、幕府の要人

や他藩の大名がうらやむほどのものでした」と話します。一方、藩としても幕命には絶対に背けない立場でありながら、何も落ち度のない酒井氏が、大幅に石高が減ることとなる



天保12年4月、中川通荒屋敷（現在の藤島地域新屋敷地区）で、領知替えに反対する百姓たちの大集会が行われた。この規模の集会は他にも庄内各地で何度も行われた。  
「夢の浮橋」致道博物館蔵



領知替え中止となった天保12年7月、鶴岡七日町橋脇の伽羅屋（床店）が店先で通行の人々に祝い酒を振る舞った。「夢の浮橋」致道博物館蔵

コラム  
三  
きつねめん

藩主が「お居なり」になったことを受け、領民が藩主に献上するために菓子商に依頼して作った打ち菓子。「居成」を「稲荷」にかけていて、現在でも縁起菓子として鶴岡市内の各菓子店で販売している。

これまで述べたように、天保12年7月の三方領知替えは、百姓たちの反対運動によって実現されませんでした。しかし、この事件は、幕府の権力に対する反対と、百姓の生活に対する心配から起きたものです。また、この事件は、江戸時代の社会構造や、藩政の運営方法に対する批判的な視点を示すものでした。



天保12年1月、川北一番上り11人が、江戸城の大手門を出てきた水野忠邦たち老中に駕籠訴を実行した。  
「夢の浮橋」致道博物館蔵

《年表》  
188~178年前

●天保4(1833)

- ・最上川や赤川の大洪水が起きる
- ・冷夏による大凶作となる
- ・大地震が起き、加茂に9メートル近くの津波がくる

●天保9(1838)

- 郷村の救済を図る農政改革を実施する  
●天保11(1840)

- 三方領知替えが申し渡され、庄内百姓たちの反対運動が始まる

●天保12(1841)

- 将軍家慶より三方領知替え撤回が伝えられる

●天保14(1843)

- 庄内藩に印旛沼疎水工事命令が出る



藩主が「お居なり」になったことを受け、領民が藩主に献上するために菓子商に依頼して作った打ち菓子。「居成」を「稲荷」にかけていて、現在でも縁起菓子として鶴岡市内の各菓子店で販売している。



特集  
酒井家  
庄内入部  
400年①

# 戊辰戦争

265年にもわたる徳川幕府による支配が続いた江戸時代。ついには会津藩と共に新政府軍の征伐対象となってしましました。

そして「負けなし」といわれた庄内藩の戊辰戦争へと突入していきます。

江戸幕府の沿岸警備の強化に向かって、庄内藩に品川御台場の警備と西蝦夷地の警備・経営が命じられた江戸末期。家督を継いで1年で急逝した酒井忠寛に代わり、忠篤が13代となつた翌年の文久3（1863）年には、江戸市中取締りも命じられ、同年に委任された新徵組・小林組（後の大砲組・新整組）と昼夜巡回を始めます。以後、庄内藩は国許・江戸・蝦夷の3つの支配体制を持つこととなり、1年交代で人員を大きく入れ替えながら、江戸の治安維持に努めました。

その頃、国許では藩政への不満をもつ一部家臣たちが企てた藩政改革が明るみになり、慶応2（1866）

年11月より彼らの一斉捕縛が始まりました。いわゆる大山庄太夫一件（丁卯の大獄）です。鶴岡市郷土資料館の今野章さんは、「当時、忠篤がまだ15歳と若かったこともあり、庄内藩の政治的な判断はすべて父親の忠発が下したと思われます」と話します。

翌3年12月25日、庄内藩が幕命により薩摩藩邸を焼き討ちします。幕府を挑発するため江戸で乱暴を働く浪人を薩摩藩が扇動していたことが理由でした。翌年の1月3日、鳥羽伏見の戦いが勃発。混乱の最中、忠篤と藩士たちは江戸から庄内に戻ってきます。「この頃、新政府は『庄内藩が恭順の意を示し、藩主が



北に進軍した庄内藩の一番大隊と二番大隊は慶応4年8月、横手で新政府軍・秋田藩軍と激戦。横手城を陥落し、秋田藩兵の遺体を竜昌院に丁重に葬った。「戊辰戦争絵巻」致道博物館蔵

謹慎すれば処分なし」との方針を出していました。庄内藩もそのつもりでしたが、事実上解体した幕府から江戸市中取締りなどの手当として受け取った寒河江・柴崎の領地支配を、2月後半から始めたのです。それが原因となり、ついに征伐対象となつてしましました。

慶応4（1868）年4月、新政府軍は仙台から山形に入り、新庄に進軍してきます。24日に清川口で戦火が上がると、庄内藩は酒田本間家による最新式の武器による武装と、江戸市中取締りで培った統率の取れた軍勢によって、各地で連戦連勝の強さをみせます。しかし同盟軍が次々と敗北することを受け、降伏を決断します。9月28日のことでした。「ただ庄内藩は余力もあつたし、ドイツか

らの武器輸入の話も進めていたので、降伏については相当意見が分かれたようです。最終的には忠發が決めましたが、これ以上戦を続けていれば、会津のように城下が焼け野原になつていたかもしれないし、その後の西郷隆盛との親交もなかつたでしょう。ギリギリでの英断だったと思います」こうして江戸時代に幕を降ろした庄内藩は、以後、新たな時代へと歩みを進めていきます。



慶応3年12月25日、主力の庄内藩1000人に、諸藩の1000余人を加え、薩摩藩邸を包囲し、焼き討ちした。「薩州屋敷焼撃之図」致道博物館蔵

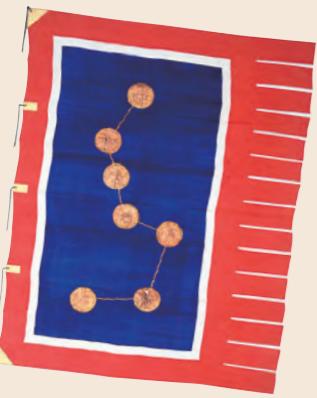
《年表》

177~153年前

- 弘化元（1844） 庄内藩預かりに反対する天領百姓の大山騒動が起きる
- 安政元（1854） 品川御台場護衛を命じられる
- 安政5（1858） コレラが流行する
- 安政6（1859） 蝦夷地の西側一帯の警備と経営を割り当てられる
- 文久3（1863）
  - ・江戸市中取締りを命じられる
  - ・新徵組を委任される
- 慶応2（1866）
  - ・領内の百姓たちによる山王神社境内打寄りが起きる
  - ・大山庄太夫、赤沢隼之助など藩政改革派が拘束される
- 慶応3（1867） 幕命により薩摩藩邸を焼き討ちする
- 慶応4／明治元（1868）
  - ・新政府軍が庄内藩征討を決定し、庄内藩の戊辰戦争が始まる
  - ・庄内藩が降伏する

コラム四

## 破軍星旗



連戦連勝の活躍で、戊辰戦争で「鬼玄蕃（げんば）がきた」と恐れられた酒井玄蕃率いる庄内藩二番大隊の破軍星旗。中国故事に倣い、北斗七星を反転し、必勝を期した。鶴岡市指定文化財。致道博物館寄託



慶応3年12月25日、主力の庄内藩1000人に、諸藩の1000余人を加え、薩摩藩邸を包囲し、焼き討ちした。「薩州屋敷焼撃之図」致道博物館蔵

シャープなフォルムと  
シンメトリーの美しさ  
整然とそろえられた藁のすがすがしさ  
こんなしめ飾りを飾ったら  
いつもと違うお正月を迎えるそう?!

## 庄内たがわ農協 藁工芸部会のしめ飾り

お正月、新たな年の神様を家庭に迎えるために、神棚や玄関に飾るしめ飾り。期間は12月28日頃から松の内までといわれているが、すぐに片付けるのがもったいないしめ飾りを発見した。

手がけるのは鶴岡市藤島地域を拠点とする「庄内たがわ農協藁工芸部会」。昔から稲作に熱心なこの地に藁工芸部会が誕生したのは昭和60年。化學肥料に頼らない農業を目指す「有機農業研究会」との同時発足で、「稲作文化は藁の文化」をモットーに、庄内の藁細工の掘り起こしや技の継承に努めてきた。しかし近年は高齢化によって人員が減り、現在は作り手が2人しかいないという。このしめ飾りは、庄内で昔から作られてきた通称「とおし」。作り手の齋藤榮市さんは、以前はもつと俵型に近い形だったが、藁工芸部会で作るようになってから、耐久性や見た目を考慮して今のような形になったという。実はしめ飾りの形状は、地域性を反映して全国各地に多様なタイプがある。それらを取材して歩いた森須磨子さんは、著書の中でこのしめ飾りを「俵のしめかざり」と記し、「稲作には不向きだった北の土地」の「切実な豊作への願い」と分析している。なるほど。

しかもこのしめ飾り、材料の藁は齋藤さんが一から育てているものだという。専用の田んぼ6畝で、8月の炎天下、朝5時から手作業で青田刈りして天日干しをしているのだ。齋藤さんは、「庄内ではしめ飾りを古くなるまで一年中飾る人が多い。新年も紙垂だけ取り替える人が多い」という。それなら、こんなに丹精込めて作られるしめ飾りを、家の守り神としてずっと飾ろうっと。



齋藤さんが現在つくっているしめ飾りには、他に通称「ねじり」もある(左写真の右)。また毎年九州から大量に注文があるという「亀」と「鶴」は、縁起物として年中飾ってOK(左写真の中央と左)。庄内地方での「とおし」の取り扱いは、主婦の店各店、鶴岡の戸村法衣佛具店、庄内町の岡本善光堂など。サイズは3種類。

藁工芸 齋藤榮市 0235-64-4739  
出羽庄内地域デザイン 0235-64-0888

(取材・文 長谷川結)



# 秋麗

庄内俳句紀行

## 余目のまちを歩く

収穫の時期を迎えた

黄金色の田と青空に

赤いコンバインが映える。

やさしい日差しを受けながら

のんびりとまちを歩いた。



余目八幡神社

季語

秋麗

あきうらら・しうれい  
麗かに晴れ渡る秋の日。  
秋、陽気が良くてのどかなこと。

旧余目町は、庄内地方の中央に位置し、平成17年に立川町と合併して庄内町となつた。現在の中心地は、江戸時代に周辺の農民が集住して形成されたという。子どもたちの声が聞こえる八幡公園、その隣にある余目八幡神社の鳥居をくぐると、境内に鳥の声が響き、鎮守の森を成す櫻と松の巨木がそびえ立つ。空高く枝葉を広げるその木肌に手を添え、木の鼓動と地域のこれまでの歴史に思いを寄せた。

行われ、大行列が練り歩くという。

### 秋麗の鳥海山立つや醤の香

—あべ小萩

八幡神社のほど近いところにある醤油蔵「ハナブサ醤油」を訪ねると、入り口では、数輪の深紅の縷紅草が季節の終わりを告げていた。文政6(1823)年創業のハナブサ醤油は、現在15代新左衛門のもと、今もほとんどの職人の手作業で製造している。麹の甘い香りが漂う中、奥の枯山水に進むと借景に鳥海山を望んだ。白い竜胆の花がそつと足元に咲く。冬は一面雪景色、春には敷地内にある紅枝垂桜が見事に咲き、いつ訪れても季節の移ろいを楽しむことができるという。

### 風染めて金木犀は色こぼす

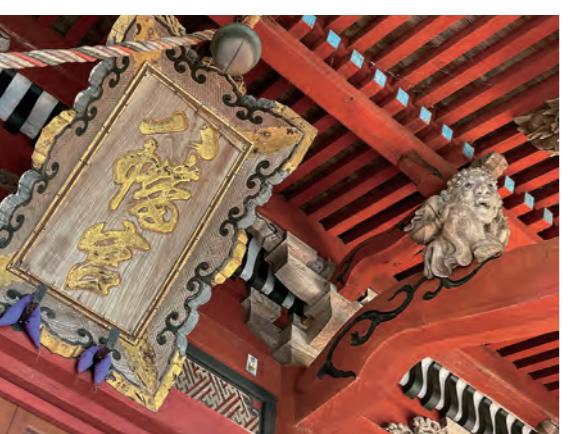
—田中道子

八幡神社のほど近いところにある醤油蔵「ハナブサ醤油」を訪ねると、入り口

八幡神社は、余目郷の総鎮守として養老3(719)年に大分県から勧請されたと伝えられる。文化11(1814)年に建てられた現在の社殿は、羽黒山頂に建つ三神合祭殿と様式が同じく、そのおよそ4分の1の大きさで、間近に見える彫刻を一つ一つ丁寧に辿るとその技術と迫力に圧倒される。毎年9月には例大祭が

この世をばわが世と鳶や秋麗ら

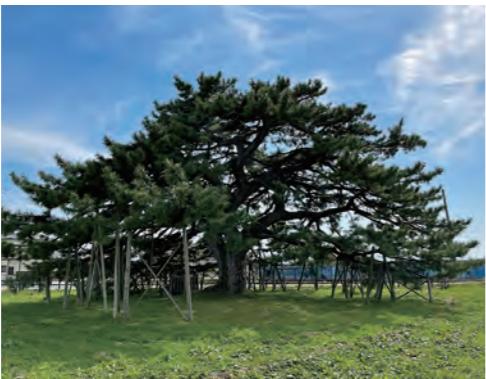
—林翔



余目八幡神社

### 晩年が集まつている白式部

—山口啓介



植田の地蔵の松



乗慶寺の白式部



ハナブサ醤油

帰り道、「払田の地蔵の松」に立ち寄った。このクロマツは全体が傘状に開き、高さ約10メートル、根まわりの枝が4.3メートルあり、樹齢370年ほどといわれる。長い間、ここで暮らす人々を見守ってきた松である。

ゆっくり歩いてみなければ出会えない景色、またそこで暮らす人と話すことで見えてくる景色もある。その土地の歴史に触れてみるとことは、日常の贅沢な時間となる。

写真・文＝あべ小萩(月刊俳誌「月の匣」同人、俳人協会会員)